

## ニーチェのディオゲネス・ラエルティオス論

初期ニーチェの文献学に寄せる一考察

東谷優希

## 序

「かつて文献学であったものはいまや哲学となった」——一八六九年五月、パーゼル大学古典文献学員外教授の就任に当たって行った講演「ホメロスの人格について」の掉尾を、ニーチェはこの言明で飾った。一体、新進気鋭の文献学者をして「哲学」を意欲する所信表明を打ち出さしめた要因は何であったのか。この問いを考察するに当たっては、「ホメロス問題」を論じた講演の内容に踏み込む前に、ニーチェ自身の文献学的営為に目を向ける必要があるだろう。転じて見ると、一八六六年の秋から

一八七〇年の春にかけて、ニーチェは「ディオゲネス・ラエルティオス」という名のもとに伝わる著作（以下、本稿ではこの著作については『ギリシア哲学者列伝』という邦題に倣って『列伝』と、著者名についてはニーチェに倣ってラエルティオスと略記する）の典拠問題に取り組み、断続的にその成果を発表していた。就任講演がその間に為されたものであることに鑑みれば、先の言明には、まさに文献学に従事するなかで生じた文献学に対する何らかの批判意識が反映されている、と読むことも許されよう。即ち、文献学者ニーチェの自己批判こそが、哲学者ニーチェの誕生の契機となっていると考えられるのであ

る。

文献学者ニーチェと哲学者ニーチェとの連続性については、今まであまり省みられていない。なるほど、ニーチェが当時の文献学界から次第に離反していく要因はショーペンハウアーの哲学やヴァーグナーの総合芸術からの影響、そしていわゆる文献学の歴史主義化に対する批判意識にあると、しばしば指摘されてきた<sup>1)</sup>。これは間違いいではない。しかし、このように論ずるのみでは哲学者ニーチェの思索に注目することはできても、文献学者としてのニーチェを見落してしまいかねない。例えば村井則夫は、ニーチェ哲学の全体に見られる特性を「差異化と統合」の緊張関係として捉え、その哲学の「元型」を文献学のうちに見出す<sup>2)</sup>。ニーチェに於ける文献学と哲学の連続性に着目するその視点は首肯できよう。しかし、ラエルティオス論とホメロス論を一面的に、哲学者ニーチェの作品であるかの如く扱ってしまうならば<sup>3)</sup>、どうして学問上の所信を表明するに相応しい就任講演という場でニーチェが「ホメロス問題」を選んだのか、といった疑問には答えられない。それは引いては、件の言明に込められたニーチェの問題意識を看過してしまうことを意味するだろう。この点、ニーチェは「文献学とは別のところに哲学を打ち建てるのではない」、そうではなく「文献学の研究のうちに、彼にのみ固有の『哲学』を期待し始める」と

指摘しているのは西尾幹二である<sup>4)</sup>。しかしその西尾にしても、一方でニーチェのラエルティオス研究を詳らかに論じ、さらに就任講演について「ニーチェは公開の場にはじめて漠然と新しい疑問を提出した」と正しく述べていながら、他方でホメロス問題は「講演の表向きのテーマ」「流行のテーマ」に過ぎず、「今ここではわれわれにさして関係がない」としている点で<sup>5)</sup>、ラエルティオス論とホメロス論との連続性を掴み損なっていると言わざるを得ない。いずれの仕事も多くの示唆を与えてくれる力作ではあるものの、文献学者としてのニーチェの問いを捉え切れない憾みがある。

本稿は一本の補助線を引くことで、ラエルティオス論と就任講演との接続を試みる。それは *Quellenforschung* と呼ばれる、文献学の方法論である<sup>6)</sup>。「ラエルティオス」と「ホメロス」という二つの固有名詞を並べたときに見えてくるのは、ともに *Quellenforschung* の対象であったということに他ならない。

文献学的な視点から両論を繋いでみせることによって、ニーチェが文献学者としての葛藤のなかでどのように哲学者へと変貌していくのかを描き、以て従来とは異なったニーチェ像を提供すること、これが本稿の目的である。

議論は以下の通りに展開していく。先ず *Quellenforschung* について、そして『列伝』の典拠問題にこの方法論が要請される

背景について、簡単に言及する。(第一節) 続いて、ニーチェによる Quellenforschung を、公表された三論文のうちの二本、即ち「ディオゲネス・ラエルティオスの源泉資料について」(一八六八/一八六九、KGWII.1.75-197) 及び「ディオゲネス・ラエルティオス源泉資料及び本文批判への寄与」(一八七〇、KGWII.1.191-245) の行論に注目して概観すること、それらの議論の前提にあったラエルティオスの人物像に対する想定を指摘する。(第二節) そのうえでラエルティオスに取り組む最中に書かれた遺稿を参照し、ニーチェ自身が Quellenforschung という方法論の限界と問題点について自覚的であり、文献学という学問そのものに対する反省が生まれていたことを示す。この反省こそ、ニーチェが文献学に「哲学」を要請する契機となったのであった。(第三節・第四節) このように文献学者ニーチェと哲学者ニーチェとの連続性を捉えることで、本稿は初期ニーチェの「哲学」とは一種の「学問の哲学」であったと主張する。この視点は、『悲劇の誕生』に対する従来の読みとは異なった読みを示唆することになるだろう。(第五節)

## 一

近代の文献学に於ける Quellenforschung という方法論の萌

芽は、F・A・ヴォルフの『ホメロス序説』に求められる。過去の証拠を無視してきたがゆえに自己充足し調和のとれた全体性として過去を描いていた十八世紀の不毛な銜学を、新たな歴史学的文献学によって刷新する、という目的を抱いていたヴォルフは、「古代のあらゆる証言」<sup>①</sup>に基づく徹底した資料批判をホメロス研究の基盤に据えたのであった。そうして真正と判断できるテキストを立てるといふ基礎的な作業の重要性を示し、文献学的な専門知識の正当性を根拠づけたのであるが、その結果、伝承されたホメロスのテキストに散見される食い違いや矛盾点は、そのテキストがより古い時代に歌われていた本来は独立した詩歌の集成であって、伝承と収集の過程を経て現存する形へと編纂されてきたことの証左である、と見做されることになった<sup>②</sup>。ここから、始源の詩人たるホメロスに直接由来する「真正」の部分と、後世の劣った詩人の挿入による「不純」な部分とを厳格に峻別し、これらが混淆している現存テキストからそれぞれを抽出していくという過程を通じてホメロスの真正テキストを再現すること、換言すれば、失われた源泉の *Ursprung* を然るべき学問的手続きを踏んで再構成すること、これが文献学の課題の一つとなったのである。ここに、現存する伝承作品を、一方でその元となった様々な源泉資料へと解体して資料内の相互関係を確定し、他方で散逸してしまっただ源泉資料の再

構成を行うという、高度で専門的な技法である *Quellenforschung* が、文献学の正統的な方法論としての地位を獲得する<sup>9)</sup>。過去についての確たる知識の獲得が文献学の存立基盤とされた以上、この方法論が『イリアス』や『オデュッセイア』と性質を同じくする『列伝』に対しても適応されることになるのは必然の流れであった。

『列伝』を一読すれば明らかな通り、ラエルティオスは様々な著作を参照し、それらを典拠として直接ないし間接に引用して、自らの作品に組み入れている。問題は、しかしその記述が様々な矛盾を孕んでは論理的・一貫性を欠き、意味の通らない箇所が散見されるばかりでなく、全体を埋め尽くしている数々の引用でさえ、その境界が曖昧であるという様相を呈している、という点にある。なるほどそのような難点を解消するには、問題となる個々の記述に関して単純に無視する、解釈を施す、あるいはより意味の通る記述となるよう校訂を施すなど、様々な方法が考えられる。しかし、個別的にその場凌ぎの対策を講じることによってでは全般的な解決とはならないことは明らかであった。とするならば、『列伝』に内在している問題については一挙に、総合的に解決されるような別の方策を探るより他はない。即ち、ラエルティオスの源泉資料を確定し、再構成するという方法である。

かくして『列伝』の典拠問題は、十九世紀には多くの学者たちの研究テーマとなるに至る。ニーチェのラエルティオス論もまた、このような学界の潮流に棹さしていた<sup>10)</sup>。それゆえその議論は、ラエルティオスが「いかなる著作を利用したのか」という問いを前提にして展開されることになる。その際ニーチェの念頭にあったことは、遺稿の記述から、概ね次のように言える。先に挙げたような『列伝』の性質については、その全体が実のところラエルティオスという人物の独創によるものではなく、彼の手許にあった資料が殆どそのまま書き写されたものである、という仮説を立てることによって、整合的に理解できるものとなる。そうして、かくかくの箇所はしかしかの資料を用いていたのである、と決定できたならば、問題含みの一節を十分に説明することが可能となるだろう。さらに、ラエルティオスがいかなる資料を直接に用いていたのかを同定することができたならば、著作が伝えている情報の信憑性について、現代人はより正確に評価できる立場に到達することになるだろう。(KGW/5, 38-39) こうしてニーチェは、『列伝』に対して *Quellenforschung* を試みていく。

## 二

『列伝』に関するニーチェの議論は細部にまで及ぶ広範なものであるが、その殆どすべては、自らの「根本仮説」(KGWIII/1, 203)の正しさを演繹的に証明していくための論証という体裁をとっている。その仮説とは「ラエルティオスはディオクレスの抄録である」(KGWIII/1, 131)<sup>1)</sup>、即ち「ラエルティオスの全体は、僅かな補足部分や装飾部分を除けば、抜き書きされたディオクレス以外の何ものでもなく」(KGWIII/1, 203)という、極めて簡潔なものであった<sup>2)</sup>。少なくとも公表された論文はいずれも、この仮説に基づいて執筆されている。

ここで『列伝』の典拠問題についてのニーチェの見解を端的にまとめれば、以下の通りとなる<sup>3)</sup>。——ラエルティオスは詩人であった。自らの作品を後世に残したいと考えた彼は、哲学者たちの伝記のなかに、自分の詠んだ詩歌を入れ込むことを思いついた。(KGWIII/1, 193f.) 著作の骨格となる伝記については、その殆どを一個の著作、即ちディオクレスの著作から一言一句書き写した。このディオクレスこそ、直接用いた資料を明示する学識ある人であったために、勢いラエルティオスの著作もまた、言わば間接的な学識の宝庫となるに至ったのである。(KGWIII/1, 131, 201-203) とこころでラエルティオスはまたファ

ポリノスの著作を読み、時折そこからの抜粋も自らの著作に加えたため、ディオクレスからの記述は不自然に短縮されることになった。(KGWIII/1, 131) さらにまた、ピュロンに関する記述については全く別の資料から、恐らくはテオドシウスから引用したと考えられる。(KGWIII/1, 207) ——かくしてニーチェが最終的に下した結論は次のようになる。

ラエルティオスの著作からディオクレスに帰されるものを除けば、僅かに残るのは次のものである。第一にラエルティオスが自身の『パンメトロス』から付け加えたもの、第二に彼がファポリノスを読んでそこかしこに挿入した書き抜き、そして最後に「……」懐疑派の学説及び『学統記』である。(KGWIII/1, 206)

ニーチェの議論はこのように、最初に立てられた仮説の確認を以て閉じられるという円環構造を為している。これは確かに洗練された見事な議論であると評して差し支えないだろう。いくつかの点で疑問を差し挟む余地があるとは言え、『列伝』が様々な問題点を抱えるに至った次第や、個々の齟齬を来すような箇所については、ニーチェの仮説を採用することによって整合的に説明がつくように思われる。

さて、右の結論に至ったニーチェの議論の前提にあったのは、ラエルティオスの人格に対する辛辣な評価であった。「以下の研究は、ラエルティオスには全く価値がない、ということを出発点と」し、しかも「これが唯一の出発点であることを証明するつもりだ」(BAW.4.215)と、ニーチェは明確に述べている。その際考慮されなければならないのは、「第一には文芸のジャンル。第二にはラエルティオスの著作家としての性格。第三には道徳的な性格」(Ibid.)とされた。第一の点については、「学説誌」や「伝記」という性質上、古代後期に活躍した数多の散文作家たちと同様ラエルティオスもまた前人たちの仕事を収集し、選別し、改訂し、編纂することを通じて自らの著作を作成したのだ、という指摘である。古代の哲学者たちに対する現代の立ち位置とラエルティオスの立ち位置とは、そう大きく異なるわけではない。ラエルティオスの頃までには既に、記述の対象である哲学者たちが没してから幾世紀の歳月が流れていた。彼らの多くについては原典を読解することが非常に困難であったし、そもそも著作が流通しておらず、入手することさえ叶わないという場合も少なくなかった。たとえ流通していたとしても、しばしば不完全で、文章は毀れており、なかには捏造されているものさえあった。そこで幾多の学問的著作が——概説、要約、註釈といった形で——生み出されていくことになる。ラ

エルティオスもまたこのような潮流に棹さしていたのであり、彼が先達たちの学識を利用するのもごく自然な成り行きであった。とは言え以上の事情は Quellenforschung が要請される背景にあった共通了解に過ぎず、かかる見解にニーチェの獨創性は認められない。問題は第二と第三の点にある。

ニーチェはラエルティオスを一人の「写字生」と見做した。

それも、目の前にある文献に対して敬虔な態度を以て筆写する修行僧の如き模範的写字生ではなく、自尊心に満ちた傲慢な写字生として取り扱った。論考の随所に見られるニーチェのラエルティオス観はすべてこの想定に従っており、この想定に基づけばこそ「根本仮説」は主張するに値する論となったのである<sup>13)</sup>。ニーチェがラエルティオスに付与した注目すべき特徴としては、以下の四点を指摘することができよう<sup>14)</sup>。

第一に、ラエルティオスは「怠惰な書き手である」。怠惰であるということとは、ここでは様々な資料を用いる労を厭い、できる限り少ない著作で記述を済ませようとする傾向を、そして資料の内容を惰性的に書き写す傾向を意味している<sup>15)</sup>。

この点がニーチェの議論の「根本仮説」を支えていることは疑い得ない。ニーチェは先ず『列伝』の第七卷四十八節から八十三節までのみならず、三十八節から四十八節をも、つまりストア派の言論に関する箇所全体がディオクレスに負っていると

いう解釈を示す。(KGWII/1, 77-78) として八十四節から一六〇節までの記述もまた、したがってストア派に関する全記述が、ディオクレスの著作を逐語的に書き写されたものであると断言する。(KGWII/1, 79f.) さらにエピクロスに捧げられた第十巻もまた、ディオクレスただ一人に負っていることが論証される。(KGWII/1, 85f.) そしてそこから、著作全体が主としてディオクレスに依拠しているという議論へと収斂するのである。

(KGWII/1, 127f.) かかる推論を可能にしているのが、上記の如くラエルティオスは惰性的に単一の資料だけを延々と写し続ける写字生だという想定に他ならない。そして続く次の二点が、この想定の特長となる。

第二に、「その学識が間接的である」こと。ラエルティオスは対象となる人物について自分ではその著作を読まず、他の典拠からの引用によって代替している<sup>16)</sup>。そして第三に、ラエルティオスは「意図的に誤解を招く参照指示をしている」。ニーチェに拠れば、ラエルティオスという人物は、小さな盗みを自白することによってもっと大きな盗みから目を逸らさせようとする盗人に他ならない<sup>17)</sup>。

しかしながら第四に、ラエルティオスは「つねに眠気に襲われている」状態にあった<sup>18)</sup>。盲目的にディオクレスを書き写すことによって、例えば全体の均衡を破るほどのストア派の記述

の異常な長さ、そしてエピクロス派の存続に関する不自然な記述など、決定的な箇所ではラエルティオスは綻びを見せてしまう。(KGWII/1, 80, 88f.) ゆえに、その手管もいまやニーチェによって暴かれるに至った、というわけである。ニーチェによって描き出されたラエルティオスとはこのように、知性に欠け、道徳的に咎のある人物であった。

右の如きニーチェの想定の妥当性については極めて怪しいものであるという印象を拭い難くとも、それに基づいた行論の鮮やかさを否定できないのは確かである。数年後、ニーチェに異議を唱えることになるH・ディールスやP・マースといった大家にしても、その非難は専らニーチェの立てた仮説(結論)の内容に絞られているのであり、方法論それ自体に向けられることはなかった<sup>19)</sup>。ニーチェの方法論が文献学的に正統なものであったことは、現代の学者にも認められているところである<sup>20)</sup>。

このような評価は、やがて公刊される『悲劇の誕生』に対する学界の冷酷な反応が、主として方法論を無視したその手法に向けられたのとは対照をなす点で、注目に値する<sup>21)</sup>。ニーチェは間違いなく正統的な文献学者であった。それゆえ、ラエルティオスに取り組む最中のニーチェ本人には既に、この *Quellentforschung* という方法論への疑念が芽生えていたことは、更に注目に値する。公表された論文に於いて散見される確信に満ち

た言明とは裏腹に、一八六八年三月から一八六九年五月のあいだに書かれたノートから窺えるのは、自らの学問的営為に対する懐疑の吐露に他ならない。学界に公認され、自身も用いていたその当の方法論に対し、ニーチェは疑義を呈しているのである。

### 三

ニーチェは自らが取り組んでいる仕事について、次のような比喩を以て綴っている。

目の前にはどこまでも霞のかかった大地が広がっている。そして我々は、恐らくは正しいのだろうという感情を抱きながら、その地図を描いている。だが、期待や確信を得られることはないのだ。(KGWV/5,98)

この「我々」という複数形は、すべての文献学者たちに立ちしかる事態を言い表していると解せよう。過去を、それも古代という過去を対象とすることに伴う困難とは何よりも、極めて数が少なく、しかも大抵の場合は不正確で不完全な資料を通じてしか対象に接近できない、という事情にある。ここからし

て *Quellenforschung* に於ける議論の形式と成果は脆弱なものとならざるを得ない。ニーチェが先ず指摘するのはこの点である。

主たる災難は、第一には余りに僅かで、第二には余りよく知られてもいない代物と取り組まねばならないという事情にある。我々の場合で言えば、ラエルティオスとは、一大勢力となつて展開した文芸流派のうちで唯一、完全な形で伝えられた残骸なのである。ラエルティオスを除いて我々が知っているのは、それも大抵の場合ただ彼を通じてのみ知っているのは、一連の文芸史家の名前だけなのだ。(KGWV/5,96)

『列伝』という唯一の残存著作から、その背後にあったと想定される豊かな学問的伝統について一体だけのことを実証することができのだろうか。あるいはより一般的に、限りある現存資料から、古代世界の様々な相についてどれだけのことを確定できるというのか。証拠が欠けている以上、帰納的な論証方法に頼ることは叶わないし、普遍的な見解を提出できるという見込みもない。それでも探究を試みようとするならば、「直観的に得られたイメージ」(KGWV/5,97)である自らの仮説を信じて対象に取り組みより他はないだろう。かくして、議論の

形式は仮説的推論 *abduction* とならざるを得なくなる。(実際ニーチェのラエルティオス論は、かくかくの仮説を立てた場合、著作の性質をより整合的に説明することができる、という趣旨となっていた。)したがって、得られた結論が必然性を伴うこととはない。そこで同時に、これが学問的方法論として妥当であるのかという疑問もつきまとう。とりわけ帰納主義的思考に支えられた実証主義を奉じる自然科学者からは、凡そ論証ではないとして斥けられることは間違いない。

ここでラエルティオスに試みられるよう要求されている「……」方法論に対しては、厳格に教育を受けた今日の自然科学者や数学者たちから根本的な反発が向けられている。この方法論の最も一般的な形式の要点は、同時にこの形式がもつ弱点でもあるのだ。つまり、一連の特殊な現象を一挙に解消するとされている仮説が、結局のところ一つの可能性に過ぎず、その排他性と拘束力は、それと対等の地位にあるいかなる可能性も見落とされていない場合にはじめて立証されることになるのである。(KGWV/5, 98)

ニーチェ自身かくの如く認識していたように、*Quellenforschung* の成果は精密な吟味に耐えられるものではない。それに

対する評価は飽くまで他の仮説よりもよりよく説明できる、という弱い基盤に依拠するより他なく、単なる可能性を脱するものではないのである。「要するにこの分野に於いては」とニーチェは言う、「現存する資料が、輪から輪へと同じ力強さを以て組み合わせられている一つの論理的な鎖という形式の中へ注ぎ込まれ得ない以上、純粹に論理的な道筋を経て目的地に到達するということはあり得ないのだ。」(KGWV/5, 97)

*Quellenforschung* が確固たる *Quelle* の獲得に到達することなく、その結論は結局のところ仮説的な臆測に留まらざるを得ないという洞察に、ニーチェは身を以て逢着していた。ニーチェがラエルティオス研究から得たのは、古代の哲学史に関する確たる知見などではなく、自らが武器としていた *Quellenforschung* という十九世紀の文献学の基幹を為していた方法論が、いかに恣意的な結論をしか導けないものであるのか、という認識だったのである。二〇世紀以降この方法論が次第に衰退していったことを思えば、ニーチェの懐疑は一つの徴候であったと言える。

証明も反駁もしようがない以上、*Quellenforschung* の成果についてはその真偽を判定することはできない。余りに恣意的である、という指摘ができるのみである<sup>(21)</sup>。ニーチェの結論が正しいのか間違っているのかを判定できる地平は存在しない。

同様に、ニーチェの批判者たちの主張が正しいのか間違っているのかを判定できる地平もまた存在しない。「ニーチェの根本仮説が既に反駁されたとは思われないし、現在のラエルティオス研究の水準からして、反駁可能であるのかどうかも疑わしい」<sup>(23)</sup>とは、バーンズの言葉である。

とは言え、以上のようなある種の不可知論については、文献学に於いても既にヴォルフによって示唆されていた<sup>(24)</sup>。過去の不可知性をいかに克服するか、という課題に答える形で方法論が精緻化されていったとも言えよう。また、後述するように、ニーチェは文献学に於ける実証性の不備を否定的に捉えることに終始しない。根本的な問題は寧ろ、この方法論への態度にこそ見出される。様々な制約にも拘らず過去についての知識を獲得しようとしている文献学者は、実のところ一体何をしているのだろうか。

#### 四

ある古典学者が指摘するように、ニーチェが文献学者となつた十九世紀後半とは、「一面的に方法を誇示する、形式偏重の操業状態と結び付いた停滞期が生じ」、「純粹に歴史的な意図に終始していた」<sup>(25)</sup>時代であった。自然科学を範として学問の発

展度と完成度を計る実証主義の風潮は文献学をも覆い、歴史的・批判的方法<sup>(26)</sup>に基づいた知識の獲得こそ、文献学の使命と見做されていたのである。しかし、方法論に厳密に則って導き出されるのは、本当の古代像なのだろうか。これが、方法論への懐疑とともに提起された、ニーチェの問いである。

結局のところ資料には内容の豊かさも信憑性も欠けている。現存しているのは、余りに僅かで余りにぼやけた絵画の残骸であって、確信を以て修復することはできない。それにも拘らず人は敢えて「修復を」試みようとする。すると最終的に見えてくるのは、それが原画ではなく、その人自身の手による、拵えものである、ということなのだ。(KGW1/5, 96 強調引用者)

やがて『悲劇の誕生』にて「絶対的であると自己錯覚している樂觀主義」(KGWIII/1, 113)と告発される文献学者の信念、学問的方法論に基づけば確たる過去の知識が獲得されるとする、文献学を支配していた信念への批判の萌芽が、この一節から読み取れよう。かかる信念に基づけばこそ、Quellenforschungは可能であった。問題は、学問的方法が他のどの方法よりも優れたものだと想定されていること、学問的な手続きだけが過去

の知識に到達するための唯一の方途であると考えられていることである。その結果、古代の姿は方法論に適うよう変形されざるを得なくなるのだ。

事実、ラエルティオスの人物像に関するニーチェの想定は *Quellenforschung* からの要請に他ならない。換言すれば、ニーチェがラエルティオスに帰属させた四つの特徴はすべて、この方法論に適うように設定されていたのである。第一の「怠惰な書き手である」という点に関しては、系図を立てることの困難は、そこに加えられるべき可能性のある作品の数が多ければ多いほど格段に増して行くために、手許にあったと想定される資料は出来る限り少ない数である方が望ましいとされていた、という文献学上の要請を指摘できる。また、第四の「眠気に襲われていた」という想定の変側には、盲目的な伝承は、源泉資料から派生資料への系統関係を透明で確実なものとする、という認識がある。さらに第二、第三の点によって、当該作品に内包されているどの情報も唯一の直接的な典拠にしか基づかない、という推定が確実なものとなった<sup>17)</sup>。

要するにニーチェの想定は経験のないし論理的に確立された古代観を根拠にしていたのではなく、寧ろこれらの想定が認められてはじめて学問的手続きが可能になる、という事情に基づいていたのである。当時の文献学では、仮構された源泉及びそ

こからの伝承の潮流は因果関係を有し、それが実際に存在したことを示す確たる物的証拠を提出することができなくとも、その因果関係が示されさえすれば学問的有効性を保証する、と考えられていた。しかし、この因果関係を構築するために極めて強い理論負荷が掛かることは明白である。*Quellenforschung* は同一性の確証を源泉の仮構へと置換させた、そしてその仮構された源泉とは、文献学者「その人自身の手による拵えもの」なのだ。これこそ、ニーチェがラエルティオスに対する *Quellenforschung* の試みを経て辿り着いた、文献学に対する批判的意識に他ならない。

学問上の所信を表明するに相応しい就任講演という場でニーチェが同じく *Quellenforschung* の対象であった「ホメロス問題」を論じたのは、決して偶然ではなかった。講演でニーチェは *Quellenforschung* への懐疑を公言するに至り、この方法論への信仰を捨てない文献学者に対して「原初の完全な構想を追い求めている者たちは、ひとつの幻影を追い求めている」(KGWIII, 265) と、冷徹に宣告する<sup>18)</sup>。いわゆる「分析派」と呼ばれる人々の主張の根底にあるのは、自らがホメロスのもとで見出したいと望んだものの先取り——「その人自身の手による拵えもの」——ではない。かかる要求を掲げて過去のテクストに目を向ける者は、実質的には探求すべきものを何ら有

していない、そのとき過去はつねに自らが望むものを映し出す鏡像に過ぎなくなってしまうからである。そしてこれはまた、ニーチェ自身がラエルティオス論で陥っていた傾向に他ならない。方法論に適う形で立てた仮説を古代に適応させることは、現在にとつて都合の良い人間像をそのまま古代に当て嵌めることに繋がり、時代的・地理的・文化的な差異が捨象され、往々にして古代の実体というものが阻まれてしまう。このような自覚を以て、ニーチェは就任講演の掉尾を「かつて文献学であったものは、いまや哲学となった」即ち「凡そあらゆる文献学的営為は一個の哲学的世界観によって取り巻かれ垣を巡らさねばならぬ」(KGWII/1, 268) という言葉で飾ったのであった。

ここでの「哲学」は、以上の考察に則して言えば、文献学という学問を遂行するに際しての、過去に関する人間の認識の成立根拠を問い質すことの謂いとなるだろう。やがて明言するように、ニーチェにとつて文献学とは「我々の時代のなかで反時代的に——時代に逆らい、そうすることによって時代のために、望むらくは来るべき時代のために——作用するという意味」(KGWIII/1, 243)を担う学問であった。就任講演で掲げられた「哲学」とは、文献学を駆動させていた信念を相対化し、「時代に作用する」という任務を果たすべく提唱された、反省的思考だったのである。

## 五

かくして、以降のニーチェの思索は「我々にとつて学問とは何であるか」という問いを巡って展開していくことになる。その深化の一つには、かつて自らを苛んだ恣意性即ち客観性の不備という問題に関して「実証することのできない哲学的思索がなお価値をもつ、それも大抵の場合、学問的命題よりも多くの価値をもつ」(KGWIII/4, 32)として、積極的に評価する点が挙げられよう。仮説的方法に否定的な実証主義的学問観に対し、ニーチェはこう答える。学問から分離され得る哲学が存在しないように、哲学から分離され得る学問もまた存在しないのだ、と。後年の講義録を引用しよう。

歴史的に理解するということは、特定の事柄を、哲学的な前提のもとに把握することには他ならない。この前提の高さが歴史的な理解の価値を決定する。なぜなら一つの事柄は無限定なものであり、決して完全に再現され得ないものだからである。(KGWII/3, 344)<sup>(9)</sup>

謂わんとしていることは明白だろう。歴史的・批判的方法を金

科玉条の如く掲げる当代の文献学が要求しているような、恣意的な取捨選択や予断を排除した事実の観察や記録というのは、幻想ではないか。「一つの事柄は無限定なもので」あって、それが過去の事実としての意味ないし価値をもつものとなるのは、それに対峙する現代の我々がその事柄に視線を向け、その事柄のうちに把握せんとする意味ないし価値を読み取るからに他ならない。文献学者が自身の関心に基づいて事実の意味を付与するのである。文献学者が、いや一般に学問に従事している者が「描く世界像は、主観的な世界像と本質的に何ら違うところはない。それはまったく我々の意味によって構成されている。」(KGWIII/3, 163) 学問的な世界構成とは、芸術的な世界構成と同様、人間の主観的な創造の一形態なのである。とすれば、方法論に対する信仰——これもまた一個の哲学だろう——とは、かかる認識の限界に対する無意識的な防禦策なのではないか。その結果、自己充足した現状を肯定するばかりの「現世的な協和音」(KGWIII/1, 111) をしか生み出せないならば、文献学が「時代に作用する」ものとなるためには、次のことが自覚されねばならない。

人間は自らが主観であることを、それも芸術的に創造する主観であることを忘れることができる限りに於いて、幾許かの

安心感と信頼と一貫性を持って生きるのである。

(KGWIII/2, 377)

ここでは「哲学」ではなく「芸術」という言葉が用いられている。しかし重要なのは語の選択ではない。過去と現在とのあいだに存在する異質性、「不協和音」(KGWIII/1, 151) を鳴り響かせ、過去と現在とのあいだに動態的な流動性を生み出すための、学問の相対化こそが肝要なのである。やがて文献学界との決定的な訣別を齎すことになる『悲劇の誕生』も、合理主義一辺倒の「野蛮」が蔓延る学問への反動の余り、その対極にある徹底した非合理主義に陥ってしまった憾みがあるとはいえ、過去と現在のあいだに打ち立てられた閉じた価値の循環構造に対する批判の視点に貫かれているのは疑い得ない。この読みは、『悲劇の誕生』にディオニュソスのものの復興を唱える反理性主義者ニーチェではなく、学問の哲学者としてのニーチェを見出すことになるだろう。しかし本稿はもはやそのための場ではない。

## 結

本稿は、ラエルティオスの典拠問題という文献学者としての

専門的な仕事を通じてニーチェが文献学に「哲学」を要請するに至った、その次第を示してきた。このことが意味するのは、ニーチェの「哲学」は文献学を棄てることによって始まるのではなく、文献学に内在し続けたからこそ、ニーチェは文献学に「哲学」を要請せざるを得なかった、ということに他ならない。

ニーチェに拠れば、自らの仕事をも含めて、文献学は凝り固まった現在と過去の循環構造に陥ってしまっていた。そのような現状を呈する文献学に対し、自らを拘束している方法論絶対主義の馬勒を外すよう求めたのである。ニーチェが異議を唱えているのは学問それ自体に対してではなく、学問が呈示し得るのは過去に関する修正可能な記述の一部であって、つねに真であるという保証を与えてくれる地平は存在しない、ということを確認しない学問的態度に対してであった。方法論に対する信仰は、認識の限界に対する正当防衛となっていた。かくして、文献学もまた一つの価値観に基づいているということが忘却され

ていたのである。ニーチェの言う「哲学」とは、この事態を暴露し、学問的営為の成立根拠を改めて想起させる、反省的思索であった。「何のための学問か」という問いを掲げることによって文献学は、方法論の過度な尊重が本当に真理追求を意味するのかという問いを、そしてこの問いと並んで、方法論を尊重することの意味、後年の表現で言えばその生にとっての価値を、問うことができるのである。

重要なのは学問を否定することではなく、学問を使いこなすことである。つまり学問はその目標や方法のあらゆる点に於いてどこまでも哲学的な見解に依存していながら、そのことを容易に忘れてしまうのだ。学問を使いこなす哲学はしかし、学問はいかなる程度にまで拡張することが許されるのか、という問題にも思慮を巡らさねばならない。哲学は価値を定めなければならないのだ。(KGWIII/4, 12)

略号

本稿で使用するニーチェの文献は以下の全集版に拠る。

BAW = Friedrich Nietzsche, *Werke, Historisch-kritische Gesamtausgabe*, hrsg. von Hans Joachim Mette, Karl Schlechta und Carl Koch, Werke in 5 Bde., München: C. H. Beck 1933f.  
KGW = Friedrich Nietzsche, *Werke, Kritische Gesamtausgabe*, hrsg.

註

- (1) 例えば湯浅弘「ニーチェと古代ギリシャ文化」、『川村学園女子大学研究紀要』第二〇巻第一号(二〇〇九年)、五五頁。
- (2) 村井則夫『ニーチェ 仮象の文献学』知泉書館、二〇一五年、四三頁以下。
- (3) 同書、五四―五九頁。
- (4) 西尾幹二『ニーチェ』第二部、中央公論社、一九七七年、五三頁。
- (5) 同書、一五八―一五九頁。
- (6) 通常 *Quellenforschung* とは「語は『出典研究』と訳されるが、文献学に於いては単なる「出典研究」以上の意味が込められ、十九世紀から二〇世紀の初頭にかけて興隆した一つの方法論を指す固有名詞として扱われている。そこで本稿では訳出するこ

von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin/New York: Walter de Gruyter 1969-.

参照の際には拙訳を用い、各全集の略号と巻数、該当箇所の見数を本文中に記す。「」は省略を、「」は引用者による補足をそれぞれ示している。強調は断らなご限り原著者によるものである。

- (7) ときを控え、原語のまま表記するところとした。  
Fr. A. Wolf, *Prolegomena ad Homerum: sive, de operum Homericorum prisca et genuina forma varietate mutationibus et probabili ratione emendandi* (1799), Cambridge University Press, Cambridge, 2014, XXXIII. 以下本書からの引用の際には章番号の指示に留める。
- (8) *Ibid.*, XI.
- (9) 以上の定義については Glenn W. Most, "Quellenforschung", in: Rens Bod, Jaap Maat and Thijs Weststeijn (eds.), *The Making of the Modern Humanities III*, Amsterdam: Amsterdam University Press 2014, p. 207, 212 の記述を参考とした。
- (10) 文献学史上の背景については『列伝』の訳者である加来明俊

による解説も参考になる。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』下、岩波文庫、一九九四年、三六六頁以下。ディオクレスはマクシミアの出身とされる人物で、その生涯については殆ど知られていない。ペリパトス派とアレクサンドリア派の流れに倣って『哲学者伝』と『哲学者総覧』を書いたことが、他ならぬ『列伝』によって伝えられている。ニーチェはこの人物がエピクロスの信奉者であり、その最盛期は紀元後一世紀初頭であると見ている。(KGWII/1, 87f)

(12) 詳細な解説としては Marcello Gigante, "Nietzsche und Diogenes Laertius", in: Tilman Borsche et al. (eds.), *Centurien-Geburten: Wissenschaft, Kunst, und Philosophie beim jungen Nietzsche*, Berlin: Walter de Gruyter 1994, S. 3-16 特頁 S. 7-13 を参照。ウィリアム・Jonathan Barnes, "Nietzsche and Diogenes Laertius", in: Anthony K. Jensen and Helmut Heit (eds.), *Nietzsche as a Scholar of Antiquity*, London: Bloomsbury 2014, p. 119 を参考にした。

(13) 「ラエルティオスの源泉資料に関するこの研究全体を、我々はある確実な考察を出発点として開始したが、もしこれが「……」否定されるならば、我々の仕事は直ちに無益なものとなってしまうだろう。しかし写学生 scribitor ラエルティオスに下した判断が認められる限り、そのようなことを恐れる必要はない。」(KGWII/1, 131)

(14) 以下の点に引く Glenn W. Most et Thomas Fries, "Die Quellen von Nietzsches Rhetorik Vorlesung", in: *Centurien-Geburten*, op. cit., S. 30-31 に多々を引くこと。

(15) そしてその「ストア派の」倫理学と自然学の言明は、「ディオクレスの著作にも記載されていたと推定される」ラエルティ

オスに於いても論じられている。このことからして、これらが同じディオクレスから借用されたものではないとしたら、どうしたものだろうか？「……」それとも、ラエルティオスは今まで利用し尽くしてきた資料を、何らの理由もなく投げ捨てたのだ、と考えるべきなのだろうか？」(KGWII/1, 79)

(16) 「ラエルティオスがいかにしてそのように『哲学史の手引書から抜き書き』したのか、というそのやり口は否応なく、我々に彼の道徳的な性格を表明してしまう。文学的な財産ということに関して彼は「……」何の考えもなかったか、あるいは邪で不純な考えをもっていた。彼は、多くの引用は学識の証明である、という考えを殆どすべての学者たちと共有していたし、また多くの学者たちと同様、引用を書き写すのは許されることだ、と考えていた。自らの学識に読者が驚嘆することに彼は満足を感じてきた。彼が惜しみなくそこかしこに引用をまき散らしたことの理由は「こゝにある」(BAW4, 219)。「哲学者たちの歴史を編纂するに当ってラエルティオスが自分自身で源泉と根源とに向かって遡って行ったということなど、全くと言っていいほどない。」(KGWII/1, 131)

(17) 「より確実なことをして言えるのは、ラエルティオスが三十八節から一六七節に至る長い叙述を一人の著作作家から抜粋したというところ、そして例外があるとしても若干の短い箇所に限られる、ということである。なるほどラエルティオスはここを明確には述べていない。彼は他人の知識を盗む者が常とするように、狡猾にも一度か二度ディオクレスを証人として召喚している。読者は彼が多くの資料のうちの一つとしてディオクレスを用いたのではないか、という誤解に誘われるのだ」(KGWII/1, 84)

- (18) 「さてラエルティオスはここでもまた、例の如く眠気に襲われながら筆者していったために、ある特定の人物に言及するディオクレスのこの言葉を自らの書物に、躊躇うこともなく写し入れたらふあつた」(KGWH/1, 89)
- (19) Vgl. Barnes, op. cit. p. 123f.
- (20) Vgl. Gigante, op. cit. S.7.
- (21) Vgl. Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf, "Zukunftphilologie: eine erwidung auf Friedrich Nietzsches, geburt der tragödie", Berlin: Gebrüder Borntraeger 1872.
- (22) Most, op. cit. p. 215.
- (23) Barnes, op. cit. p. 128.
- (24) 『ホメロス序説』で実証されたことを要約すれば、ホメロスの標準的テキストは原初の姿と殆ど一致せず、現代では古代アレクサンドリアで編纂された形態を復元することが限界であり、伝承されたテキストのどの部分が「原ホメロス」にまで遡るのか精確に知ることは叶わない、ということになるろう。ヴォルフはしかし、ホメロスの復元という望みを棄てることはなかった。就任講演でヒーチェが問題にするのは「原ホメロス」に到達可

- 能であるとするヴォルフの信念であるが、その問題意識は本稿で参照している遺稿と通底している。
- (25) Werner Jaeger, "Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf", in: *Humanistische Reden und Vorträge*, Berlin: Walter de gruyter 1960, S. 216.
- (26) 本稿の注17と18は Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf, op. cit., S. 8 を参照。
- (27) Quellenforschung に於て系図構築は *recensio* と同様、その水平の伝承 *contamination* を除外することができた場合にのみ可能であると知られる。Vgl. Leighton D. Reynolds et Nigel G. Wilson, *Scribes and Scholars: A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature*. London: Oxford University Press (4<sup>th</sup> ed.) 2013, p. 241.
- (28) 「原初の完全な構想」とは、ヴォルフが確定し得るとした「原ホメロス」の「技巧と構想」(Wolf, op. cit. XXXI) の謂うに他ならぬ。
- (29) Großoktav 版全集十七卷三二九頁に從う *ein völlig Reproduzierbares* とはなく *nie völlig Reproduzierbares* と読む。  
(おみきや ゆいお / 博士後期課程)